歴史散歩

れきしさんぽ No.35

応永地蔵板碑を訪ねて

地蔵信仰

地蔵菩薩は、釈迦如来の入滅後、弥勒仏が成仏するまでの五六億七千万年の間、六道[註1]の衆生を救済するとされる仏様です。その信仰は平安時代以降に一般に広まり、現在も私たちが苦しいことや困ったことがある時などに助けてくれる身近な仏様として、観音菩薩と共に信仰されています。

久留米市では古い例として津福本町の長法寺や大善寺町朝日寺に鎌倉時代の地蔵菩薩像が残されています。また、今から約600年前にあたる室町時代の応永年間（1394～1428）頃には地蔵板碑が多数造られています。

① 地蔵来迎図板碑（宮ノ陣町、県指定）

久留米に現存する板碑の中では最も古い正平22年（1367）の銘を持つ地蔵菩薩板碑です。

本来は高良山愛宕社奥の院にありましたが、明治2年（1869）に宮ノ陣町の国分寺へ移されています。

高さ約1mの板石に、右手に錫杖、左手には宝珠を持ち、蓮華座の上に立って救いの手を差し伸べようとする地蔵菩薩の姿が細密に線刻されています。

応永年間の地蔵板碑

② 七木地蔵板碑（長門石町、市指定）

応永3年（1396）の銘を持ち、肥前の戦国武将、

龍造寺隆信が戦勝のお礼に洪水の心配がない千栗に移したところ、一夜のうちに元の場所へ戻ったという伝説がある板碑です。

高さ1.83mの自然石を彫りくぼめ、錫杖を持ち、ややうつむき加減に蓮華座の上に立つ地蔵菩薩が半肉彫りで表現されています。

この板碑を手本としたと考えられる板碑が、筑後川右岸の佐賀県鳥栖市やみやき町に10基ほど残されています。

③ 医王寺の地蔵菩薩彫像板碑（寺町、市指定）

医王寺裏の墓地に立つ板碑です。

高さ約60㎝の自然石の平坦部に、蓮華座の上に立つ地蔵菩薩が彫られています。

註1　六道・・・仏教において、迷いある者が巡るとされる、天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の6つの世界

応永５年（1398）の銘を持つこの板碑以降、久留米に造立された板碑の地蔵菩薩立像は、錫杖を持たず、左手には宝珠を持ち、右手は与願印[註2]を結ぶ姿をしています。

この板碑は江戸時代の寛文６年（1666）、童子の追善供養碑として転用されています。

④ 岩井の地蔵菩薩彫像板碑（山川町、市指定）

御井小学校の東側、岩井の清水の上に造られた地蔵堂に祀られている板碑です。

高さ約1.25mの自然石を彫りくぼめて繭型の光背と地蔵菩薩像を半肉彫りで表現する板碑で、額には白毫[註3]のための穴があり、左下方には応永11年（1404）２月の銘があります。

背面には15名の願主名が彫られていますが、その中には「馬尭良」という中国名らしき名前もあり、注目されます。

⑤ 白口の地蔵菩薩彫像板碑（荒木町、市指定）

白口川にかかる鶴亀橋の東側にある地蔵堂に祀られた高さ85㎝の板碑です。

自然石を長方形に彫りくぼめ、蓮華座に立つ地蔵を半肉彫りで彫り出しています。全体の表現は岩井の地蔵板碑と良く似ていますが、白毫孔はありません。

石の両側面には、応永11年（1404）８月の銘と13名の願主の名前が刻まれています。

⑥横馬場の地蔵菩薩彫像板碑（高良内町、市指定）

現在は横馬場地区の観音堂横に祀られていますが、本来は宗崎から高良内へ向かう野道に立てられていた板碑です。

高さ約１mの自然石を彫りくぼめて地蔵立像を彫り出し、応永11年11月の銘があります。額には白毫の孔がありますが、岩井や白口板碑の表現に比べると、耳の表現がなく、衣服の表現も簡略化されています。

⑦遍照院の地蔵菩薩彫像板碑（寺町、市指定）

遍照院山門を入った東側の墓地に立つ地蔵板碑です。

下半分は失われていますが、約50㎝分が残る自然石を彫りくぼめて、地蔵菩薩立像が半肉彫りに表現されています。白毫孔や耳の表現はありませんが、衣服は皺まで細かく表現されています。

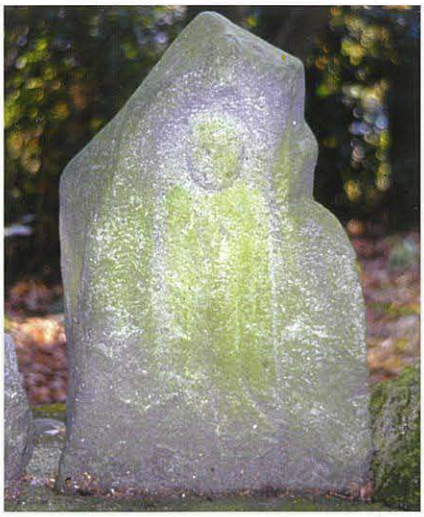
左下に「應（応）」の一文字が残り、岩井・白口・横馬場の応永11年銘板碑と良く似ていることから、その３基とほぼ同じ時期に同じ工人が製作した板碑と考えられます。

⑧日輪寺の地蔵菩薩彫像板碑（京町、市指定）

日輪寺の山門をくぐると境内が小高くなっている場所がありますが、実はその小山は５世期末～６世紀のはじめに造られ、国の史跡にも指定されている日輪寺古墳の墳丘です。墳丘上には観音堂があり、その横に高さ約60㎝の地蔵板碑が祀られています。

註２　与願印・・・手の平を前に向けた形。人々の願いを聞き入れ、望みを叶えることを意味する印と言われている。

註３　白　毫・・・仏の眉間のやや上に生えているとされる白い巻き毛。如来と菩薩に見られる。



この板碑は、応永 22 年（1415）8 月の銘がありますが、彫り方は浅い上に磨耗が著しく、表情や持ち物の詳細は不明です。本来は城南町にあったと伝えられるものです。すぐ隣には 100 年ほど後の室町時代末期の製作と推定されている板碑もあり、表現の違いを比べて下さい。

⑨厨（くりや）の地蔵菩薩彫像板碑（東合川町）

地元で「クリヤ」と呼ばれる場所に立つ板碑です。

高さ約 60 cmの自然石の平面を浅く彫り込み地蔵菩薩立像が刻まれていますが、表現は簡略で、不鮮明です。

側面には願主２名と応永 25 年（1418）の銘がありますが、江戸時代中期の記録によると、元は府中（現御井町）の安養寺（あんようじ）にあり、府中の市（いち）の恵比須（えびす）として祀られていたようです。

⑩称名院（しょうみょういん）の地蔵菩薩彫像板碑（大善寺町、市指定）

境内の観音堂に祀られている板碑です。高さ約 1.2m の片岩質の板石に宝珠を胸前ではなく、左肩外に持つ地蔵立像が薄肉彫りされています。その右下には小さな仏像１体、上方には釈迦（しゃか）・阿閦（あしゅく）・不空成就如来（ふくうじょうじゅ）と考えられる種子（しゅじ）[註4]が彫られており、応永 28 年（1421）の銘があります。

⑪中島（なかしま）の地蔵菩薩彫像板碑（大善寺町、市指定）

中島公民館の傍らにある祠（ほこら）に安置された板碑です。

高さ 92 cm の片岩質の板石に地蔵立像を薄く彫り出し、その上には阿弥陀の種子が刻まれています。

大きな宝珠を左肩側に持ち、種子が刻まれているなど、称名院の板碑と共通点が多く、同時期・同工人の製作と考えられます。

応永地蔵について

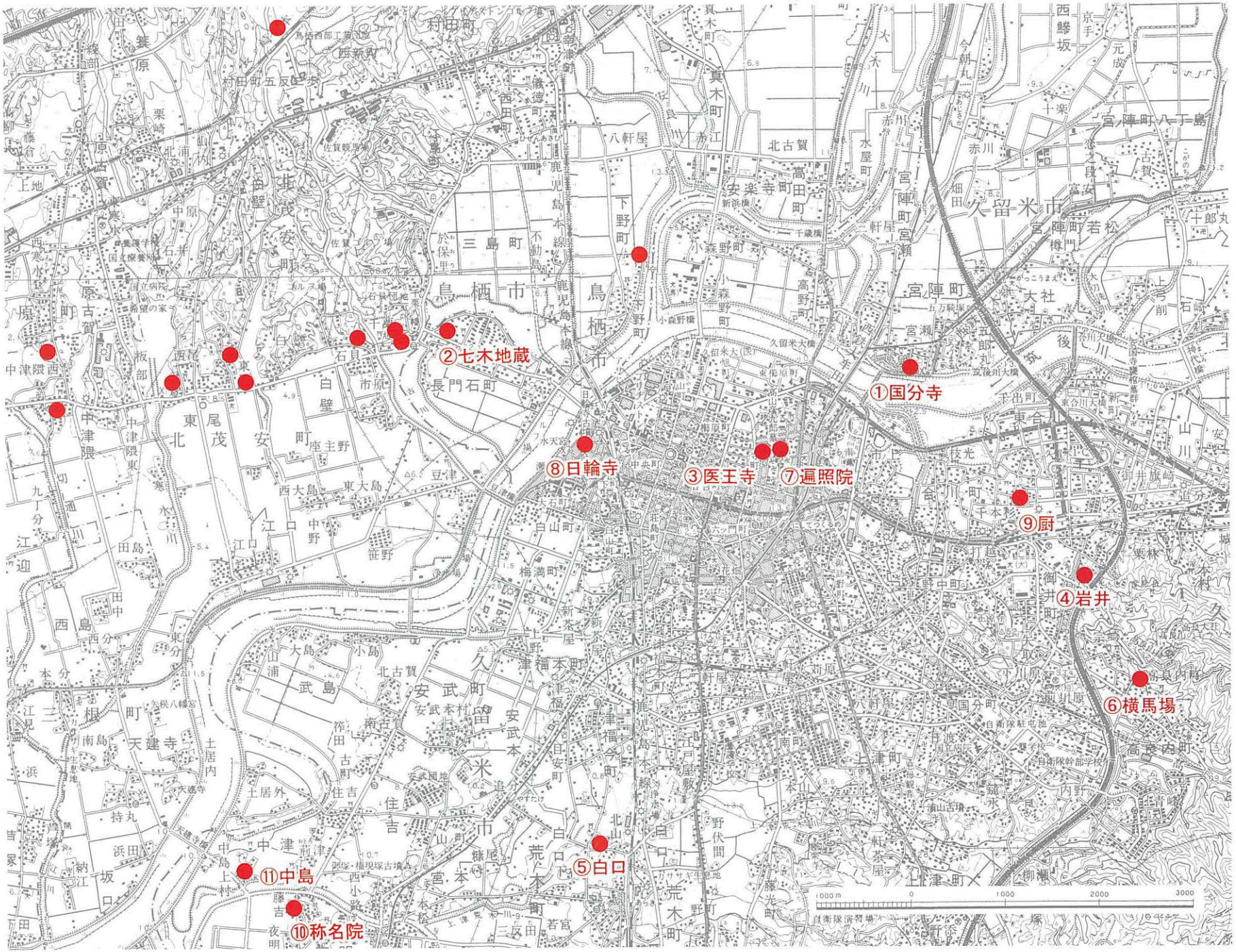
応永年間を中心に造立された地蔵菩薩彫像板碑群は、次ページの分布図を見ていただくとわかりますように、久留米市（11 基）・佐賀県鳥栖市（３基）・みやき町（７基）に多く、他には八女市上陽町（１基）、みやま市瀬高町（１基）、佐賀県基山町（２基）にも分布しています。筑後川右岸の板碑は七木地蔵板碑のように錫杖を持ち、筑後川左岸の板碑は錫杖を持たず与願印を示すという特徴があります。

板碑の分布する場所は、高良大社、大善寺玉垂宮、千栗八幡宮の勢力圏であり、また、板碑の造立に関わった方たちの名前に「道」の文字が付く名前が多いことから、当時、この地域にはこれらの神社に属し、「道」の字を共有する人々が主導する地蔵講があったと考えられています。

応永年間は室町幕府の第３代将軍を引退した足利義満が金閣に代表される別荘北山殿を拠点に権力を振るっていた頃です。50 年余りも続いた南北朝の動乱は一応終息しましたが、筑後では勢力回復を狙う菊池氏が度々筑後に侵入するなど、まだ争いは続き、平和とはいい難い時期でした。

そのような時代に生きた人々が、地蔵菩薩に救いを求めていたようすを板碑は物語っています。

註４　種子・・・古代インドの文字である梵字を用い、諸尊を表現したもの



応永地蔵板碑分布図

発行機関：久留米市 市民文化部　文化財保護課　久留米市城南町 15－3　Tel. 0942 (30) 9225　Fax. 0942 (30) 9714
発行日：平成 22 年 10 月 15 日